2026 年 3 月 22 日 朝拝 訣別説教

「天の故郷を目指して出発する」

創世記 12 章 1－9 節

鄭 ヒムチァン

創世記 12 章 1－9 節

1　主はアブラムに言われた。

「あなたは、あなたの土地、

あなたの親族、あなたの父の家を離れて、

わたしが示す地へ行きなさい。

2　そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、

あなたを祝福し、

あなたの名を大いなるものとする。

あなたは祝福となりなさい。

3　わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、

あなたを呪う者をのろう。

地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」

4　アブラムは、主が告げられたとおりに出て行った。ロトも彼と一緒であった。ハランを出たとき、アブラムは七十五歳であった。

5　アブラムは、妻のサライと甥のロト、また自分たちが蓄えたすべての財産と、ハランで得た人たちを伴って、カナンの地に向かって出発した。こうして彼らはカナンの地に入った。

6　アブラムはその地を通って、シェケムの場所、モレの樫の木のところまで行った。当時、その地にはカナン人がいた。

7　主はアブラムに現れて言われた。「わたしは、あなたの子孫にこの地を与える。」アブラムは、自分に現れてくださった主のために、そこに祭壇を築いた。

8　彼は、そこからベテルの東にある山の方に移動して、天幕を張った。西にはベテル、東にはアイがあった。彼は、そこに主のための祭壇を築き、主の御名を呼び求めた。

9　アブラムはなおも進んで、ネゲブの方へと旅を続けた。

１節「主はアブラムに言われた」。この一文は単なる始まりではありません。人類の堕落という深い泥沼に神の救いの手が差し伸べられた出来事です。この 12 章 1 節に至るまで神様が人に語られることは長く断絶していました。ノアに語られて以来のことです。ノアの時代、神様は「地上に人の悪が増大し、その心に測ることが皆いつも悪に傾いている」という惨状をご覧になり、心を痛められました。そして神様は洪水をもって地を裁かれました。しかし、神と共に歩んだノアを通して、再び人類に生きる道を与えてくださいました。しかし、ノアの後も人の悪は止みませんでした。ノアの息子ハムによる罪、そしてハムの子孫に至ってはバベルの塔を積み上げるという神への

反逆を起こします。何度回復の道を与えても、人はその反対の道を選んでしまうのです。それでも神様は人を諦めませんでした。まったく新しい形で救いの道を開こうとされました。それが、アブラムという一人の人間を選び、彼に語りかけたという出来事です。神様は人を回復させようとする確かな意志をもって、人類の歴史に介入してくださったのです。

１節をご覧ください。「あなたは、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へ行きなさい。」この命令には二つの核となる命令があります。一つは「離れる」こと。もう一つは「神が示す地へ行く」ことです。

この「離れる」という命令の深さを理解するにおいて、創世記 11 章 27 節から 32 節の記述が重要な意味を持ちます。アブラムの父テラには息子たちがいましたが、ハランは父に先立って故郷カルデアのウルで亡くなりました。またアブラムの妻サライは不妊の女で子がいませんでした。この家族には死の力が漂い、命が芽生えることのない闇が覆っていたのです。そのような中でテラは思い立ってカナンの地へ行くために、ウルを出発しました。おそらくテラも神からの促しを受け、霊的に死に向かう歩みから転換しようとしたのではないかと思います。なぜならテラが目指したカナンは、後にアブラムが神様から示される地と同じだからです。しかしテラはハランまで来ると、そこで歩みを止めてしまいました。道半ばで終え、ハランで生涯を閉じました。

なぜハランで止まったのか。それはハランが境界線であったからではないかと思います。ハランまではテラと家族にとって慣れ親しんだ地、安全や生活水準が保たれる領域でした。しかしハラン

から出れば、もうどうなるか分からない未知の世界が待っている。テラには未練があり、その最後の一線を越えることができなかったのです。

そのような中で神様はアブラムに離れなさいと語られました。神様が「あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家」と三つの言葉で語られたことには意味があります。この三つはどんどん領域が狭くなっています。土地は生活の基盤、親族は慣れ親しみ気の知れた人たち、そして父の家は身を任せられる最も深い信頼の場所です。神様は彼の心の最も深いよりどころへと切り込み、「そこから離れよ」と命じられました。これは口で言うほど簡単な決断ではありません。そして、この離れることができて初めて、神様が示す地へ行けるのだと語られています。

神様は「離れよ」と命じると同時に、「わたしが示す地へ行きなさい」と命じられました。原文を見ると、この「行きなさい」は「レフレハー」という言葉で、単に「行け」という意味ではありません。あえて日本語にするなら「あなた自身に向かって歩んでいきなさい」というニュアンスがあります。つまり神様はこの命令の中において、アブラムの真の人格、神が造られた人としての本来の姿へ向かって行くのだ、と言われているのです。神様は救いのご計画をもってアブラムを選び、行くように命じられました。しかしそれは同時に、アブラム一人の人間の本来の姿への回復、救いでありました。アブラムが何のためにこの世界に生まれてきたのか、そのアイデンティティと使命を見出させようとされたのです。

神の命令は、命じるだけで終わりません。2、3 節には神の約束が記されています。12 章 2 節以下に続く神様の約束は七つの句になっています。「大いなる国民とする」「祝福する」「あなたの名

を大いなるものとする」「祝福となりなさい」「あなたを祝福する者を祝福する」「あなたを呪う者を呪う」「地のすべての部族はあなたによって祝福される」。

2節の約束の言葉をよく見ると、対応する二つの表現があります。「大いなる」と「祝福」です。「あなたを大いなる国民とする」と「あなたの名を大いなるものとする」。この二つは互いに呼応し、神がアブラムを「偉大なもの」とされるというメッセージで繋がっています。「国民」という言葉は、一つの定まった場所に人々が集まり、領地と主権を有する国家を意味します。神様は神にある一つの群れをアブラムを通して起こされようとしているのです。そしてこれは驚くべき約束です。なぜならアブラムにはまだ子が一人もいないからです。それにもかかわらず神様は、行きなさいと命じ、あなたを大いなる国民とすると仰います。

そして「あなたの名を大いなるものとする」という約束。この12章の直前にはバベルの塔の出来事が記されています。人々は高い塔を建てることで自分の名を高めようとしましたが、神によって散らされ、むしろ名を失うこととなりました。一方アブラムは自らの力で名を高めようとするのではなく、神の命令に従って出て行きます。すると神様がその名を大いなるものとしてくださいます。自分で自分を高めようとする者は低くされ、神の言葉に従う者は神によって高められる。この対比の中に、真の祝福がどこから来るのかが明確に示されています。

また神様はアブラムを「祝福する」と言われました。祝福とは、本質的に神様が人を創造したとき、神の目に良かった神の似姿としての人に回復させることであります。その時、神様との正しい関係の中で神様が与えてくださるすべての良いものによって人は満たされるのです。これが人間に

とっての幸いです。しかし、それだけにとどまりません。神様は 2 節の最後で「祝福となりなさい」と命じられます。アブラムは祝福を受ける者であると同時に、その祝福を流し出す管となるのです。

3 節「あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者を呪う」。神様はアブラムに対して絶対的な守りであることを宣言されます。人の「あなたを呪う者」の「呪う」は原語で、軽視する、軽く扱う、不名誉なことをする、という比較的軽いニュアンスの言葉です。しかしその後の「のろう」は真の意味での呪い、神からの強烈な罰を意味します。アブラムを軽んじる者に対して神は呪いをもって応じるという、圧倒的な保護の約束がされており、神様の約束がいかに確実なのかを示しています。

そして最後に「地のすべての部族はあなたによって祝福される」と言われました。一人の人物が全人類への祝福のはじまりとなる。アブラムが祝福を受け、祝福の管となることによって、地の果てにまで神の祝福が届いていく。これが神様の救いのご計画の全体像です。だからこそ神様はハランから離れよ、わたしが示す地へ行け、それがあなたの使命であり、あなた自身への祝福であり、人類の祝福となることなのだと言われたのです。

4 節には神様のことばに対するアブラムの応答が記されています。「アブラムは、主が告げられたとおりに出て行った。」聖書の語りは非常に簡潔です。しかし、この簡潔な記述こそが、アブラムが神の命令に応答した姿がいかに勇気に満ち、大胆なものであったかを私たちに教えているのです。5 節ではその具体的な姿を明らかにしています。アブラムは妻サライ、甥ロト、すべての財

産、ハランで得た人々など、自分に属するすべてを伴って出発しました。これはハランの地への一切の未練を残さない、完全な訣別を意味しています。

どうしてアブラムはこのような大胆な決断をできたのでしょうか。注目したいことばがあります。「主が告げられたとおりに」ということばです。アブラムが頼った唯一のもの、握りしめたたった一つのものは神のことばでありました。アブラムは自分の経験や常識を置いて、神のことばの確かさに自らを任せたのです。つまり、アブラムは神様を信じたのです。

このアブラムの歩みは父テラとの対比によって一層鮮明になります。世記 11 章 31 節によれば、テラもアブラム、ロト、サライを伴い、カナンの地を目指してカルデア人のウルを出発しました。しかし、決定的な違いが結末に現れています。テラは「ハランまで来ると、そこに住んだ」のです。テラの旅は、目的地に到達する前に終わってしまいました。対照的に、12 章 5 節のアブラムは同じように人々と財産を伴い、カナンの地に向かって出発しましたが、「カナンの地に入った」と明確に記されています。アブラムは信仰をもって、神様のことばを完遂しました。

しかし続くみことばを見ますと、神様に従う歩みが必ずしも順風満帆ではないという現実を示しています。6 節後半「当時、その地にはカナン人がいた。」アブラムが示された地は誰もいない彼だけのための地ではありませんでした。すでにそこにはカナン人が住み、彼らの営みと風習が確立されていたのです。アブラムは完全なよそ者、寄留者としてこの約束の地に足を踏み入れることになります。

しかしです。7 節を見ると、告げられたとおりにカナンの地に入ったアブラムに神様は現れてくださいました。12 章 1 節で神様はアブラムに「言われた」のみでありました。しかし今度は 7 節において神様がアブラムに「現れて言われた」のです。啓示の方法が変わったのです。言葉だけでなく、神様ご自身がアブラムの前に立たれました。なぜここで神様は現れてくださったのか。それはこの約束の重さと確かさを、アブラムに深く刻み込むためだったと思います。「わたしは、あなたの子孫にこの地を与える」。すでにカナン人が住んでいる土地を前にして、彼が直接自らの足で踏んでいるこの地を指して神様は約束されました。

「子孫に与える」この約束の中には重要なことが示されています。「子孫」とはアブラムから生まれた者でなければなりません。甥のロトは約束の担い手にはなりません。神の計画はアブラムの血筋を通って流れていくのです。さらにパウロはガラテヤ 3 章 16 節でこう記しています。**「約束は、アブラハムとその子孫に告げられました。神は、「子孫たちに」と言って多数を指すことなく、一人を指して「あなたの子孫に」と言っておられます。それはキリストのことです。**」どれほど多くの子孫がアブラハムから生まれたとしても、その約束はすべて一人のキリストへと集中していきます。これが神の救いの計画の核心です。これは当時のアブラムには分からなかったことであります。しかし、神様はアブラムを用いてこのような壮大な救いの計画をはじめられたのです。

この約束を受けたアブラムは祭壇を築きました。神の約束の前にひれ伏し、礼拝のための祭壇を築きました。7 節後半「自分に現れてくださった主のために」、約束が自分に与えられたことを記

念するのでもなく、約束をもらえた自分を高めるのでもなく、神のために、約束を下さった神様を礼拝するために祭壇を築きました。

8、9 節では、アブラムの一行がさらに南へと旅を続け、ベテルとアイの間で天幕を張り、またここでも祭壇を築いて主の御名を呼び求めました。そしてさらにネゲブへと至ります。ここでアブラムの旅全体を俯瞰してみましょう。彼はカナンの地に北から入り、中央を縦断し、南の果てまで歩き通しました。神様が「あなたの子孫に与える」と約束されたその土地の全域を自らの足で踏みしめました。まだ何一つ所有していません。しかし彼は神のことばを握って歩みました。信仰の応答としてアブラムが自分の足で踏みしめて行った地は、実際後の日、確かに子孫たちに与えられたのです。

またアブラムは城壁で囲まれた町に住むのではなく、天幕を張って移動しながら生きた旅人でありました。これは不安定で脆弱な生き方です。しかしアブラムはこの地に永住するのではなく、神が備えてくださる場所を待ち望みながら旅する者としての歩みが確かに見えるのです。

今日のみことばは今日に生きる私たちに何を教えているのでしょうか。

神がアブラムに語りかけたという事実の重みを、まず私たちは受け取らなければなりません。長い沈黙の後に神がアブラムに語られました。これは、神が人を諦めていないという宣言でした。これは過去の終わった話ではありません。神様は今日も、私という一人の人間に関心を持たれ、みこ

とばを通して私に語りかけておられます。毎日忙しく、情報の海のような中で生きる私たちは、あまりにも多くのものの声を聞きすぎて、神の声を聞く耳が鈍くなっていないでしょうか。「主は私に言われる」という出来事は、今日もみことばを求めて読む時に起きるのです。

アブラムの父テラは、カナンを目指して出発しながら、ハランで立ち止まってしまいました。ハランは魅力的だったのでしょう。安全で、見知った顔があり、生活が保たれる場所。そこに骨を埋めてしまいました。私たちにも「ハラン」はないでしょうか。それは必ずしも地理的な場所ではありません。もう少し状況が整ったら従おう、もう少し若かったら、もう少し余裕があればという、自分の中で引いてきた境界線、神に従おうとしながら、どこかで歩みを止めてしまった過去の決断はないでしょうか。神様はアブラムに「土地、親族、父の家」と語られ、心のより深いところへと迫っていかれました。神様が求めておられるのは、私たちの心の最も深い場所にあるよりどころからの訣別です。私たちにとっての「土地、親族、父の家」自体を神様は憎んでおられるのではありません。しかし、それらが神よりも深い場所に座っているとき、神様はそこから離れよと言われるのです。

視点を変えてみましょう。私たちは「自分探し」という言葉を使います。生きる意義や意味を求めることは、万人に共通する崇高な問いです。しかし自分に問いかけるだけでは真の自分は見つかりません。今日のみことばが示すのは、人は神のことばに聞き、そのことばに従っていくときに、本来の生きるべき自分を見出すことができるのだということです。アブラムは歩き出す前に完全な答えを持っていたわけではありませんでした。歩き出したからこそ、自分が何者として生まれてき

たのかを知っていったのです。そして、はじめにアブラムは神のことばを聞いたのみでありましたが、そのことばに従って出発したとき、神様は彼に現れて語ってくださいました。私たちもまた神のことばに従ったとき、神を一層深く知り、神を体験するのです。

アブラムは「主が告げられたとおりに」出て行きました。彼は自分の経験、常識、感情、状況判断を最終的な拠り所としませんでした。神様のことばを自分のすべての計算より上に置き、最も確かなものとしました。信仰とは根拠のない楽観主義ではありません。語られた神のことばの確かさに自分の人生まるごとを投じることです。

そして忘れてはならないことがあります。神様は離れよとだけ言って立ち去られません。「行け、そうすれば」と約束を伴って命じられます。神への従順を犠牲としてのみ捉えてしまう私たちに、神の命令には必ず約束が伴っています。神のことばに従うということは宝が隠された畑を買うことなのです。それは全財産を売り払ってでも買うに値するのです。その圧倒的に素晴らしい約束に今を生きる私たちも招かれているのです。ガラテヤ 3 章 29 節「**あなたがたがキリストのものであれば、アブラハムの子孫であり、約束による相続人なのです。**」とある通りです。

それだけではありません。「祝福となりなさい」という言葉は私たちにも続いています。イエス様は弟子たちに「**あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。**」（**マタイ 28:19,20**）と言われました。

私たちが神様との正しい関係の中を歩むとき、神のことばに従って歩んでいくとき、私の存在そのものが周囲への祝福となります。あなたを通して、あなたを見て、人々がイエス様に関心をもち、イエス様に出会うことが起きるのです。これが「祝福となりなさい」という命令の現代的な意味ではないかと思います。神の祝福を受け取るだけではなく、それを流し出す管として生きることが、神が私たちに与えてくださった召しです。そしてそれを途上でやめることなく最後まで全うするようにと励まされています。

最後に私たちのカナン、目指す目的地を確認しましょう。

ヘブル 11 章 8-10, 13-16 節

8　信仰によって、アブラハムは相続財産として受け取るべき地に出て行くようにと召しを受けたときに、それに従い、どこに行くのかを知らずに出て行きました。9　信仰によって、彼は約束された地に他国人のようにして住み、同じ約束をともに受け継ぐイサクやヤコブと天幕生活をしました。10　堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都の設計者、また建設者は神です。

13　これらの人たちはみな、信仰の人として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるか遠くにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり、寄留者であることを告白し

ていました。14　そのように言っている人たちは、自分の故郷を求めていることを明らかにしています。15　もし彼らが思っていたのが、出て来た故郷だったなら、帰る機会はあったでしょう。16　しかし実際には、彼らが憧れていたのは、もっと良い故郷、すなわち天の故郷でした。ですから神は、彼らの神と呼ばれることを恥となさいませんでした。神が彼らのために都を用意されたのです。

アブラムは町の中に定住しようとしませんでした。むしろ定住地ハランを離れ、天幕を張って移動し続けました。それは読んだみことばに記されているように、神が設計者・建設者である都を待ち望んでいたからです。彼は地上の故郷に戻ろうとはしませんでした。天の故郷に憧れ、天の故郷に向かって歩き続けました。

私たちにとってもこの地上は永遠の住まいではありません。この地上がすべてではありません。クリスチャンとはこの地に仮住まいしながら、神が備えてくださる都を待ち望む旅人なのです。私たちは天の故郷を目指して出発しようではありませんか。私もそう心して、この土浦めぐみ教会を旅立っていきます。

本日はめぐみ教会での最後の礼拝メッセージ奉仕となりました。最後まで導いてくださった神様に、そして祈り、支え、ともに労してくださった皆さんに感謝して、詩を一つ書いてきました。最後にこの詩を朗読し、説教を閉じたいと思います。

「薪として生きる」

私たちの地上のいのちは、薪のようなものである。

薪には、ただひとつの使命がある。それは、燃えることだ。

燃やさず大切にしまっておけば、やがて薪は朽木となる。

腐り、崩れ、ただの塵に帰していく。

守ったはずのいのちが、静かに死んでいく。

燃えるとはどういうことなのだろう。

それは、自分のいのちを自分の腕の中に必死に抱え込むことをやめることだ。

神のみことばを信じ、その確かなことばに従って出発することだ。

自分で守ろうとするほど、いのちは固く閉じていく。

しかし明け渡し、従ったとき、いのちは初めて燃えていく。

また燃えるとは、誰かのために生きることだ。

燃えた炎は、冷え切った誰かを温める。

燃えた光は、闇の中をさまよう人に、真理への道を指し示す。

しかし、誰かのために生きることは、決して容易いことではない。

燃えるにつれ、薪は短くなっていく。燃えるとはすり減ることだ。

誰かのために生きるとは、文字通り、自分のいのちがすり減ることである。

だから燃えることに一生懸命抗う自分がいる。

保身と献身の間で繰り広げられる、一人静かな、しかし熾烈な戦いがある。

それでも、燃える時、初めて体験することがある。

キリストがご自分を惜しまず捨てられた、あの愛の深さと広さの一端が見える。

キリストの十字架が、単なる過去の出来事ではなく、今この瞬間の自分への語りかけであることが分かる。

そして燃える時、もうひとつのことが起きる。

私の醜さ、私の自己中心、私の臆病さが、炎の中で一緒に焼かれていく。

そうだ。燃えるということは、自由であり解放なのだ。

燃えてすり減った者は、人の目にはみすぼらしく映るかもしれない。

しかし、そのたましいは聖くされていく。

人は燃えることを恐れる。

すり減ることが怖い。 失うことが怖い。

だから薪を抱きしめたまま、燃やさないまま、時を過ごす。

しかし、その結果待っているのは、使命を失った朽木だ。

しかし、心の奥底に耳を澄ませてみるといい。

そこに確かに、ひとつの叫びが聞こえるはずだ。

一度きりの人生を、本当に意味あるものにしたい。 燃えて生きたい。

その願いは、神があなたの心に刻んだものだ。

薪の使命は、燃えることにある。 あなたの使命もまた、燃えることにある。

燃え尽きた薪は灰となる。

人の目にそれは終わりのように見えるであろう。

しかしそれは、終わりではない。

この地上のいのちは、旅路に過ぎない。

人は旅人であり寄留者なのだ。

燃え尽くした者のために、主は都を用意されている。

すり減るほど誰かのために生きた者のために、朽ちることのない冠が備えられている。

この世でみすぼらしく見えた者が、御前では輝く。

だから燃えることを恐れるな。 燃え尽きることを恐れるな。

この地上で燃やし尽くしたいのちは、キリストにあって甦る。

ここで流した涙は、そこで必ず拭われる。

ここで失ったものは、そこで余りあるほど満たされる。

薪は燃え尽きても、その炎が灯した光は消えない。

あなたの燃えたいのちが温めた誰かが、また誰かを温め、その光は燃え続けていく。

そして燃え尽きたあなたは、天のふるさとで、主に迎えられる。

「よくやった、良い忠実なしもべよ」

それが、燃えたいのちの、本当の結末だ。

薪の使命は、燃えることにある。 私の使命もまた、燃えることにある。

お祈りいたします。